

詩人・岡本啓

『透明の靴を編む』



服をめぐる

衣服の研究現場より

07

服をめぐる 07

一人一品

岡本啓（詩人）

『透明の靴を編む』

p3

地産街道に行く⑦

福山・和紙糸

p10

今日の補修室 第7回

衣装補修のビフォー・アフター①

p14

KCI Wunderkammer

オーバーシユーズ

p15

REPORT

展覧会

「ファッションとアート 麗しき東西交流」

p16

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「モードのジャポニスム」展、「身体」展)展、「FUTURE BEAUTY: 日本ファッションの30年」展など)や、研究誌(『DRESSSTUDY』、『Fashion Talks...』)の発行を通じて公開しています。ウェブサイト <http://www.kci.or.jp/>



「Elegance and Splendour of Art Deco」展
クレムリン美術館(モスクワ、2016年)
©京都服飾文化研究財団

詩人

×

KCI 収蔵品

一人一品

ゲスト

岡本 啓

Kei Okamoto

著名人が各々の目を通し、KCIの収蔵品を語る「一人一品」。今回のゲストは詩人の岡本啓さんです。

岡本さんは1983年生まれ。13歳で東京に移るまで仙台で過ごされました。20代後半で詩の世界にふれ、自らも詩を書き始めるようになりました。ワシントンDCに滞在中、雑誌『現代詩手帖』へ投稿した詩が2014年の現代詩手帖賞を受賞。また、帰国後に上梓した第一詩集『グラフィティ』(思潮社)が、2015年、第20回中原中也賞、第65回H氏賞を受賞しました。現在は京都市在住。今夏、第二詩集『絶景ノート』を刊行予定です。

鋭い感性と深い洞察力で静謐なことを紡ぐ岡本さん。そんな岡本さんが選んだKCIの収蔵品は、1830年代のフランス製の靴。麦わらとホースヘア(馬の毛)で編まれた繊細な逸品です。この靴を岡本さんはどのようなことばで表現したのでしょうか。

透明の靴を編む

岡本啓

コーヒーのなかの砂糖

ひさしぶりにひらいた傘に見つかる穴

火からおろしたスープの黄色い沈黙のなかに

かぼちゃが丸ごと煮崩れている

内側はいつもかがいしれない

透明の瓶にすればよかった

塩を、きらしてしまった

横倒しになったブナ

年輪は、そこで止まってしまった

幹は焚き火に放り込まれ、空にあがっていった？

いいえ、生きのびている

時折轟音に揺さぶられ

枕木としてじっとレールの重みにたえている

打ち捨てられ、静かに腐っていく内側にも

犬釘がじっと生きている

わたしだってそう

野原にはいかない

砂浜にはいかない

蚕ノ社、帷子ノ辻

この狭い区域のなかで

どれだけわたしが満足しているか

だれにも推し量れない

琥珀に閉じ込められた幼虫みたい
ちよつとだけ響くように

眩いてみた

生白いこの足を

心地の良いことばで

取り繕っているだけなのかもしれないな

内側には

雪玉にもぐりこませた石のような

悪意の一撃もあるから

ふと雨がきて

いつもの庭先に

ふいにはつきり蜘蛛の巣があらわれた

空中にひっかかった幾何学模様

捕らえられたように

見惚れていた

どこにもいけない

はじめておもった

とうとつに小さな住処をわたしは引き裂く

ねばつく糸がつまさきに絡まって

透明の一足が編みあがる

雨上がりの紫色の空

いつのまにかその紫色は低くまぎれて

夜が座り込んでいた

やっぱり

裸のままの生白い足だった

夜の土を踏んだ

岡本さんが選んだ一品

靴

1830年代 フランス製

京都服飾文化研究財団所蔵 成田舞撮影

麦わらとホースヘア(馬の毛)で編まれた繊細な作りの靴。内側は絹タフタ、靴底は革。室内で履かれたものと思われる。

本品のようなヒールがないフラット・シューズは1820年代から30年代にかけて流行したかたちである。



どこにいかなくてもいい
ただ、わたしは拒否する
わたしのための朝焼けを
息をのむほど高い、この失望こそ
わたしのもの

どんな残忍な仏頂面も
会話を交わせば

中庭がひろがって、そこからの空は高い

だからって、テロリストの犯行声明が理解できる？

あなたの内側に神秘はない

あなたにあるのは

ただただ反射する瞳

福山・和紙糸



図1 江戸時代後期の「紙衣袖無羽織」
京都服飾文化研究財団所蔵

彩色版画の和紙を採み、縫い合わせている。紙衣は温かく、冬の衣服に適していた



図2 江戸時代中期から明治期の下着「汗はじき」
京都服飾文化研究財団所蔵

衿と裾には紙布（タテ糸に綿糸、ヨコ糸に和紙糸）が使用されている。ネット状の部分はすべて和紙糸から成る



備後撚糸株式会社取締役社長、光成明浩さん

2014年の秋、「和紙 日本の手漉和紙技術」がユネスコの無形文化遺産に登録された。報道では連日、伝統的な手漉き作業の様子や各地に伝わる歴史が紹介され、そのときに和紙の魅力が再認識した人も多かっただろう。和紙を手にとると、私たちが日常に使うコピー用紙や画用紙の無機質な質感とは違い、繊維の重なりや温かく柔らかい風合いを感じることができる。紙は植物から作られている、ということに改めて気づく。

日本には、障子や襖のように紙が生活のなかに溶け込み、親しまれてきた歴史がある。衣服も例外ではなく、千年近く続いてきた伝統的な和紙製の衣服が存在する。紙衣かみこ、そして紙布しふと呼ばれるものだ。紙衣（紙子）とも書く（図1）は和紙自体を生地に見立て、柔らかくなるまで揉んだ後、糸で縫い合わせて衣服にする。鎌倉時代から庶民の安価な防寒着として着用され、江戸時代には油や柿渋、漆を塗って防水した合羽も広まった。また高級な和紙を用いたものは通人の粋とされてきた。一方の紙布（図2）は和紙を細く切り、撚りをかけて作った紙糸を用いて織りあげたものだ。タテ糸、ヨコ糸ともに紙糸を用いるものもあれば、絹糸や綿糸、麻糸をタテ糸に、紙糸をヨコ糸として織ったものもある。紙衣と紙布にみられる紙製の衣服は遠い過去のものと思われがちだが、実はそうではない。いま、注目されている衣服素材のひとつ、それが紙なのだ。

和紙を原料に独自の糸を開発する会社が広島県福山市にあると聞き、訪ねてみることにした。備後撚糸株式会社は福山市の中心部から車で約40分北西にいったところに位置している。芦田川からほど近く、周辺には繊維工場が立ち並ぶ。昭和2年創業の同社は長らく撚糸加工を専門としてきた。撚糸加工とは、紡績糸を複数本に引き揃え（この工程を「合糸」という）、それを撚糸機で撚りをかけることを指す。そして出来上がった撚糸は織りや編み専門の会社、糸を染める染色会社に出荷されていく。商社などからの要望に合わせて、同社はこれまでに多くの特色ある糸を生み出してきた。いわば糸のブランドだ。

はつらつとした笑顔で社長の光成明浩さんが出迎えてくれた。「撚糸は繊維業界の川上に位置していて、あまり表にでない工程ですが、糸に強度を持たせたり、様々な機能を与える重要な加工なんです。」例えば二種類の異なる紡績糸を撚糸にする場合、合糸の配合、撚りの方向や回数で全く違った風合いや強度の糸が出来るため、最終製品に合わせて加工内容を変えるのだという。光成さんが和紙に魅せられたのは、十年近く前のことだった。「それまで撚糸業は委託加工業というのが業界の常識だったのですが、撚糸加工会社から何か新しい糸を提案してもいいんじゃないかって思ったんです。和紙は難しいと思われてきた素材なので、チャレンジ精神に火が付きました。」商社の下請けに甘んじることなく、今までにない提案型の撚糸を世に送り出したい。そんな情熱が彼を後押しした。「これが原料となる和紙のテープです。」四国の製紙会社で特注をしているという幅1ミリの



備後撚糸株式会社の外観



合糸作業の様子



撚糸の工程

上：和紙とポリエステルによる撚糸
下：原料の極薄和紙

の極薄和紙を手取る。出来上がりの糸が想像し難いほど繊細で、かすかな風でふわふわと漂う。「和紙糸と言うと、弱くないんですか、溶けないんですか、とよく聞かれるんですよ。けど糸にするのに最適な加工をした紙を使っていますし、掛け合わせる他の糸や撚りの工程で工夫を凝らしているので、他の糸と強度は変わりません。もちろん洗濯もできますよ。」と光成さん。「確かに牛乳パックからは中身が染み出てこないし、建材にも紙が使われたりしますものね。」紙がもつ弱いイメージを払拭するのには、これまで多くの苦労があったが、近年ではこの和紙糸の特性を理解し、採用する企業が増えてきたのだという。

「それでは、これから実際に撚糸をしている工場を見に行きましょう。」と促されて工場に入ると、繊維工場独特の木と油が混ざった匂い、そして綿のほかに甘い香りがした。白いロール状の糸が整然と並び、それぞれが機械の擦れる音を立てながらクルクルと回っている。「和紙以外のものは早い回転で撚っていますが、和紙糸は回転をかなり遅くしています。綿糸と比べると何倍もの時間がかかりますね。」このとき機械にかかっていた和紙とポリエステルの撚糸は、一つのロールが出来上がるまでに60時間近くもかかるらしい。昼夜を問わず動き続ける機械は40年以上も前のものだという。「この機械でゆっくり撚らないと和紙糸はうまく出来ません。私たちの手とこの機械でずつとやってきました。愛着がありますねえ。」ここで働く人たちにとって、機械は手であり、仲間なのだ。

出来上がった和紙糸を見せてもらおうと、もはやそこに紙の痕跡はない。「和紙糸は毛羽立ちがないでしょう。糸としてとても綺麗だなあとします。そして和紙糸は吸水性や吸汗性に優れています。糸の比較でいうと、綿糸の10倍の吸水性があるんですよ。なに乾燥性や発散性も非常に高いんです。」高機能化学繊維に比肩しうる糸がローテクの機械から生み出され、いま、同社の和紙糸「備和（びんわ）」はポロシャツやジーンズになり、人気を高めている。とても軽く、シャリッとした感触が心地いい。

紙が日本の生活に溶け込んだ理由のひとつは、高温多湿な氣候風土において適した素材だったからだろう。ゆえに紙衣、紙布は決してユニークなものというわけではなく、理にかなった衣服だったのだ。そしていま、和紙糸が注目されはじめたのもおそらく偶然ではない。

取材文・筒井直子 写真・福嶋英城

和紙とは…主原料に麻、楮（こうぞ）、三椏（みつまた）、雁皮（がんぴ）、檀（まゆみ）など日本に古くから自生する植物を使用し、漉いて作ったものを和紙といひ、木材パルプから生産される洋紙と区別されます。

●取材にご協力頂いた企業・団体（敬称略）

備後撚糸株式会社

〒720-1264 広島県福山市芦田町福田 872

電話・084-958-3355（代表）

ホームページ：http://hinmen.co.jp/

オーバーシューズ

素材：絹、革、木 原産地：ヨーロッパ
製作年：18世紀後期

本品は18世紀の貴族階級の女性が履いた「パタン (patten)」と呼ばれるオーバーシューズ。靴の上から履くもう一つの靴である。当時の靴はドレスとマッチする美しい絹織物で作られるものが多かった。パタンはその靴を汚すまいと考案されたのだった。しかし、このパタンもまた繊細で愛らしい絹織物で作られているのではないかと！さらにこの上に履くパタンが要るんじゃないの、、、と心配になってしまう。(筒井)



装着イメージ

珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫

そこはまさに「驚異の部屋」。



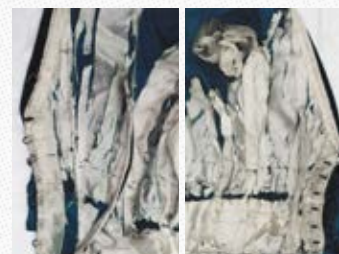
今日の補修室

TODAY'S
RESTORATION
ROOM

第7回

衣装補修の ビフォー・アフター①

補修前



補修後



今回から数回にわたって、衣装補修のビフォー・アフターをご紹介します。

ご紹介するのは1913年頃に製作されたイブニング・ドレスの補修です。表生地に損傷はほとんど見られませんが、裏生地が縦裂けし、所々落下しています。特に両肩付近は縫い糸と縫い代だけがろうじて残っている状態です。このままではマネキンへの着せ付けができないだけでなく、劣化がますます進んでしまう恐れがあります。

まず、写真撮影やスケッチで縫い目や生地の重なりなどを詳細に記録しながら、縫い留められた裏生地を表生地から慎重に取り外します。落下した生地の破片については、可能な限り元の場所を見つけて置き、見つけられなかった欠損部は、補修布（ここでは絹羽二重）を充てて補います。その後、裏生地の両面をサンドイッチ技法（オリジナルの生地を2枚の補修布の間に挟んで縫い留めて補強する補修技法）を用いて縫合し、最後に、表生地へ元通りに戻して縫い留め、補修が完了します。

このドレスは、今年4月から6月まで横浜美術館で開催された「ファッションとアート 麗しき東西交流」展（p.16参照）に出展されました。補修を施し、マネキンへの着せ付けを可能にしたことで、多くの方にご覧いただくことができたのです。（谷智恵美）



ドゥイェ イブニング・ドレス
1913年頃
京都服飾文化研究財団所蔵
林雅之撮影



谷智恵美
本品補修担当



「ファッションとアート 麗しき東西交流」展 ©京都服飾文化研究財団 林雅之撮影

「ファッションとアート 麗しき東西交流」展

会期：2017年4月15日～6月25日

会場：横浜美術館

主催：横浜美術館（公益財団法人横浜芸術文化振興財団）、
公益財団法人京都服飾文化研究財団、日本経済新聞社

幕末（1859年）に開港した横浜。以来、この地は西洋文化と日本文化の往来の拠点となりました。交流は互いを刺激しあい、それぞれのファッションや美術品に大きな影響を与えました。横浜美術館とKCIは今年の初夏、この横浜を舞台に19世紀後半から20世紀前半の美術品とともにドレスやアクセサリ類など華やかな取蔵品の数々を展覧し、その影響関係を探りました。約2か月半にわたり、多くの皆さまにご覧いただきました。誠にありがとうございました。



服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第7号
2017年7月31日発行（年3回発行）

発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団（KCI）
〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
電話：075-321-9221

ウェブサイト：<http://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城（京都服飾文化研究財団）

デザイン：坂田佐武郎

写真：成田舞、福嶋英城、伊藤ゆち子

表紙写真：『Modes et manières d'aujourd'hui（今日のモードと着こなし）』より「ゴルフ」（部分）京都服飾文化研究財団所蔵

編集後記

KCI Wunderkammer (p.15) では、普段の展覧会ではあまり展示しないような珍しい取蔵品を中心に紹介しています。先号（6号）で取り上げたのは、女性のドレスの下に隠された18世紀の取付型ポケットでした。縦40cm、横25cmのポケットはあまりに大きく、一体何を入れてたの？と思わせます。発行直後、日本女子大学の内村理奈先生から「私、18世紀フランスの遺体調査に記されたポケットの中身について研究したことがあるの！」と連絡をもらいました。内村さんによると、鍵、ハンカチ、小箱、本など平均7点もポケットに収納されていたとのこと。これならあの大きさも納得です。内村さんは「ポケットそのものを初めて見た！」と、私たちは「中身の正体が分かるなんて！」と互いに喜んだのでした。本誌では、時々こういう楽しい出会いがあります。（本誌バックナンバーはKCIウェブサイトよりご覧いただけます。）